洛友會報

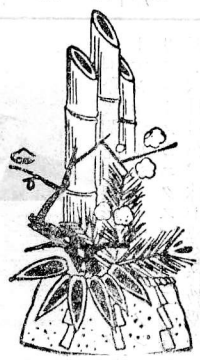
京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気系教室内
洛友会

謹賀新年

昭和六十一年元旦

洛友会役員

会長	松田長三郎
副会長	芦原義重
〃	巽本多静雄（中部支部長）
〃	真田安夫
〃	金井久兵衛
〃	大谷泰之
〃	高木俊宜
〃	老田他四郎
東京支部長	藤本一夫
関西支部長	西岡敬二
北陸支部長	松谷健一郎
中国支部長	池内義則
北海道支部長	中川修一郎
四国支部長	三国文治郎
東北支部長	深町藤吉
九州支部長	近藤文治
常任理事	池上文夫
〃	竹村清



京都大学
電気関係教室
教官一同

財団法人
関西電気保安協会
理事長　前田義里

三洋電機株式会社

株式会社 島津製作所
取締役会長　上西亮二

シャープ株式会社

フジテック株式会社
取締役社長　内山正太郎

松下電器産業株式会社
有志一同

トクデン株式会社
代表取締役　北野山人

洛友会関西支部長
藤本一夫
松下電子工業株式会社
取締役社長

日新電機株式会社

京阪電気鉄道株式会社

栗原産業株式会社
代表取締役　栗原英三

株式会社ダイヘン
四電エンジニアリング株式会社　取締役社長　長島　修
株式会社イーディシー　取締役社長　松尾　三郎
ソフトウェアコンサルタント株式会社　取締役社長　松尾　三郎
四国計測工業株式会社
千代田化工建設株式会社
高周波熱錬株式会社
株式會社日立製作所中国支店
日立化成工業株式会社　相談役　高木　正
中電化工株式会社　取締役社長　中島　正雄
株式会社電気評論社
財団法人応用科学研究所

新年のご挨拶

洛友会会長　松田長三郎

明けましてお目出とうございます、会員各位のご健康とご清福をお祈り申し上げます。

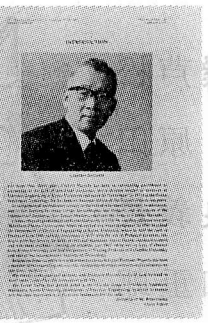
さて本年は昭和61年。歴代天皇のうちでも最も長いご在位と云うことで、誠にお目出度い限りであります。

昨年は、国内的にも国際的にも、比較的平穏無事の年でありました。世界人類が平和で、幸福でありますようにとは、全人類の悲願でありますが、しかし世界の情勢は、刻々に変化して行きますから、寸時も油断はなりませんし、国際関係の当事者はご苦労の多いことと思はれます。

交通通信機器の発達の結果、世界は、益々狭くなって来たような感じです。私が始めて西洋へ行ったのは昭和6年でありましたが、フランスのマルセーユまで、最も快速船でも34日かかりました。(この一等船賃960円でした) 尤もシベリヤ鉄道で行けば、ベルリンまで、たしか13日で行けたと思います。今はすべて国際的にスピーディーになって来ていますから、ドイツ・フランクフルトまで拾数時間で行けます。たしか何年か以前、超高速機で、拾数時間で世界一周が出来ると報ぜられたことがありましたが、そんなに急いでどこに行くとも言はれましたが、現代の人間は、益々セッカチになって来ました。落ちついていられない衝動に駆られるのでしょうが、これも止むを得ないことでありますが、心のゆとりは持ちたいものです。

さて今年の科学・技術界は、どんな進展を見せるでありましょうか。科学技術関係の方々は今年こそはと張り切って、その対策に苦心されておられることと思はれますが、我国科学技術界のリーダーであり推進者であられる読者各位におかれては、みのり多いお年でありますようにお祈り申し上げます。重ねて読者各位のご健康とご多幸をお祈りを申上げます。(終)

国際非線形力学学会誌
林　千博名誉教授記念号を発行

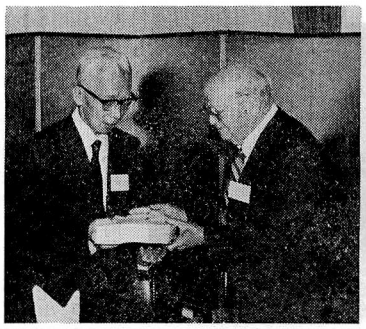


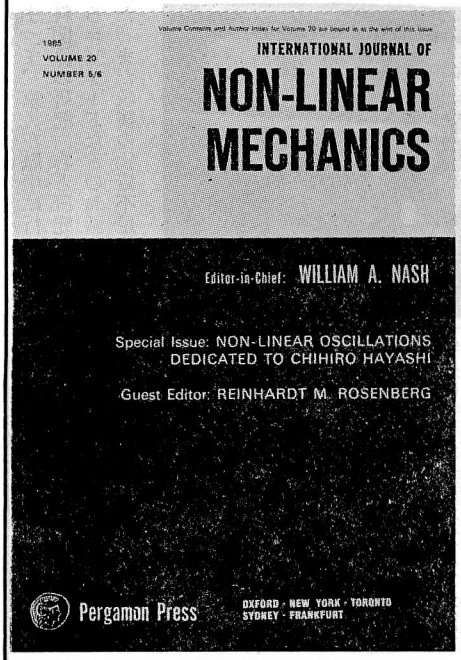
国際機関誌非線形力学（インターナショナルジャーナルオブノンリニャーメカニクス）の第二〇巻五／六月号が、林千博名誉教授の記念祝賀号として発行されることとなり、その祝賀会が去る九月一八日、林先生御夫妻をお招きして、京都ホテルに於て催されました。同誌は、一九六六年に創刊された非線形振動、非線形力学に関する専門誌であり、林先生は、創刊いらい編集委員を勤めておられます。又同誌から記念祝賀号を献呈されるのは、米国カリフォルニア大学ローゼンバーグ教授に続いて二人目のことであります。

祝賀会は、安陪稔教授の司会で進められ、まず同誌を代表して同記念号の編集を行なわれたローゼンバーグ教授が、次のような挨拶をされました。国際機関誌、非線形力学編集委員会は、同誌第二〇巻五／六月号を林名誉教授に献呈する特集号として発行することに致しました。これは、林名誉教授の非線形振動論の分野に於ける卓越した学問的業績及び教育上の業績を讃えるとともに、これらの業

績に対して与えられた日本学士院賞（一九六九年）を始めとする数々の栄誉を記念するものでもあります。記念祝賀号には東北大学吉沢太郎教授、神戸大学平井正一教授、京都大学安陪稔教授等国内の方々の他に、英国学士院会員、ケンブリッジ大学カートライト教授、ソ連ウクライナ科学院数学研究所所長ミトロポルスキー教授、米国カリフォルニア大学ローゼンバーグ教授、同、スー教授、マサチューセッツ工科大学クランデール教授等が論文を寄稿されています。

そして、カートライト教授は八二才の御高齢にもかかわらず、同記念祝賀号へ新らしく論文を執筆されたことをつけ加えられました。尚、ローゼンバーグ教授は、この祝賀会のため、わざわざ御夫人同伴で来日されたもので、祝賀会を終え直ちに帰国されました。





引き続いて林先生がお礼の挨拶を述べられ、その中で、研究を通じて親交を結ばれた多くの研究者の思い出を語られました。特にカートライト教授が、林先生の初期の論文に目を通され、親切な助言を与えられるとともに、その論文を専門誌へ掲載するように推薦されたこと、又ローゼンバーグ教授とは仏国で開催された国際会議で初めてお会いし、その折非線形力学誌の刊行の相談があったこと等を述べられました。又、その後ローゼンバーグ教授を訪問された時、都合で飛行機の到着が数時間も遅れ、真夜中になったけれど、その間、教授は、飛行場で、待ち続けていてくださったこと等、いくつかのエピソードも、御披露されました。林先生の挨拶は、いつもの通り、淡々として、簡潔なものでしたが、共に非線形力学の発展につくしてこられた研究者に対する友情と感謝の念に満ちた印象的なものでした。

その後、出席者の方々から、お祝いの言葉とともに、林先の思い出や、近況等が、述べられました。これらのお話の中から、林先生が、今でも、研究に、又新らしい学問の勉強に若々しい情熱を傾けておられることを知り古い教え子の一人として、大変うれしく、又誇りにも感じた次第であります。

林先生のお仕事は

(一) 非線形の系における平衡状態（周期振動）の安定問題

(二) 非線形の系における過渡状態の研究

(三) 非線形の系における外力による同期化現象の研究

(四) 非線形の系の写像法を用いた研究

等と、非線形振動の多くの分野に及んでいます。

私共技術者も、実際問題の中で、このような現象を経験していたことと思われますが、従来はノイズとか、異常振動として、見すごしていたと思われます。しかし最近、バイオエレクトロニクス等新らしい技術の基礎として、このような非線形システムに現われる複雑な現象に関する学問が、重要になると言われ、一部技術者の関心を集めつつあります。

林先生の成果の多くは、一九六四年米国マグロウ・ヒル社から出版された著書〝物理系における非線形振動（ノンリニャ・オシレーション・イン・フィジカルシステムズ）〟にまとめられています、この本はその後しばらく絶版となっていましたが、近年注目が高まり、今秋、プリンストン大学出版部からペーパーバック版として再刊されることになりました。これらのお仕事の中には、私共技術者にも馴染み深い発振器のような非線形振動子の周期解の安定問題の他に、非線形の系において、非線形性を強くしていく時に現われる極めて複雑なふるまいが、美しい実験結果とともに詳しく検討されています。

祝賀会は、林先生のお人柄を反映して、落着いた、暖たかな雰囲気のうちに終宴となりました。林先生、並びに奥様の御健康をお祈り申し上げます。

最後になりましたが、出席者は次の方々でした。（姓のみ、順不同、敬称略）

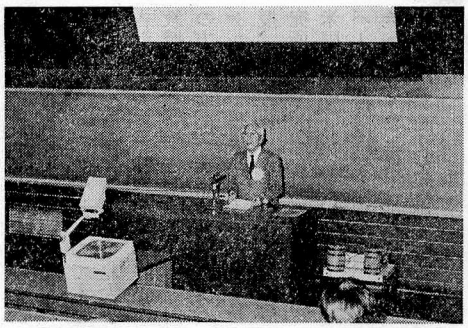
大阪工大；藤田、青井、小寺、阪口、安藤、柴山、奥田、山口、井上、京大；浮田、服部、安陪、上田、奥村、井上、倉光、阪大；坂和、神大；平井、三菱電機；喜連川、村上、梅名、土屋、福田。

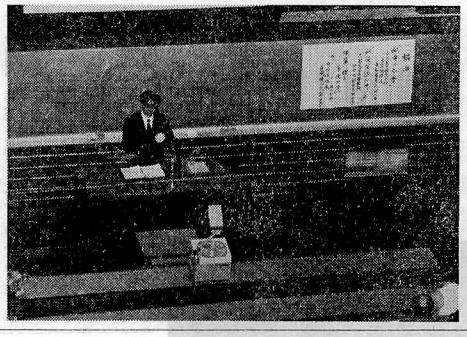
（昭和二十五年卒　梅名茂男）

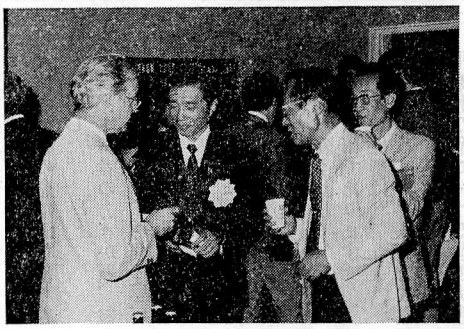
電気系教室だより

懇話会秋期講演会・懇親会について

秋の恒例の行事となった第三回電気系教室懇話会・懇親会が、今年も十月十九日（土）に、多数の先輩、教職員、学生の参加を得て開催された。第一部講演会は三名の先輩を講師としてお迎えし、午後二時より電気総合館大講義室で行われた。まず、関西電力㈱常務取締役東松孝臣氏（昭和27年卒）より「配電の今昔」と題して、同氏が入社以来今日まで携わってこられた配電技術の進歩変遷について講演があり、電気技術のみならず都市景観まで含んだ過去・現在・未来の配電技術について興味深いお話しを拝聴した。







続いて京都大学名誉教授、詫間電波高等専門学校長田中哲郎先生（昭14年卒）より「研究生活の思い出」と題して、学生時代から始まって、京大在職中に行われた材料関係の研究内容と研究にまつわるエピソードなどのお話しがあった。また戦後の物資不足時代にコンパ用のアルコールをつくった話など、昔の研究室活動を彷彿させるお話などもあり、最後に秘蔵の今は亡き阿部先生の肉声テープが披露されて一同多大の感銘をうけた。

最後に、横河ヒューレットパッカード㈱社長笹岡健三氏（昭26年卒）より「後輩に贈る。卒後三十五年」と題して、ご自分の経験をもとにして、学生時代の交友の重要さ、仕事に対する取組み方、国際性など、若い研究者・技術者・学生にとって大変有意義なお話を伺った。

第二部の懇親会は、電気総合館3階、大会議室、中会議室並びにこれらの前の廊下において、午後五時頃より開かれた。池上淳一先生の乾杯の御発声により開会し、先輩、教職員、学生を合せて約百五十名の参加者がビールを飲みながら和やかに歓談し、秋の一夕を楽しんだ。

この電気教室懇話会行事は、先輩と学生、教職員との間のコミュニケーションの道を開くことを目的にして、毎年十月中旬、学生の試験終了後の最初の土曜日に開催されています。来年も多数の先輩方のご参加をお願い致します。

教官の移動

次のような教官の移動がありました。

講師　深尾昌一郎（昭42卒）超高層電波研究センター助教授に昇任（11月1日付）

支部だより

関西支部家族見学会

関西支部恒例の家族見学会は、昭和六十年十一月十日(日)、淡路島・大鳴門橋において、大谷、池上、上之園三名誉教授はじめ二八七人の参加を得て、行なわれた。

中央径間八七六米の大鳴門橋は、現時点で日本一の長大吊橋として、また鳴門の自然美に加える人工美により、六月の開通以来、観光人気が高まっているが、他方、一八七KV送電線の装荷、安全通行のための気象観測システム、橋上面のみの照明をねらった照明施設など、電気技術とも関係が深いところである。

当日、京都大阪各三台のバスは、それぞれ七時四五分、八時二十分に出発した。フェリー乗船を確実にするため、京都発のうち二台は明石から岩屋へ渡り海岸の道を津名町志筑へ向い、京都発の残る一台と大阪発の三台は甲子園から志筑へ渡った。晩秋ながら南国的な気配を感じさせる淡路島東岸を、前者はバスの窓から、後者は海上から眺めることができた。あけがた曇りがちで、大阪では集合時刻に雨を降らせ皆を戸惑わせた空も、次第に晴間を広げるようになっていた。

志筑では、海岸の「おのころアイランド公園」にある瀟洒なレストラン「ソリメール」で昼食懇親会が行なわれた。

三百人を一時に収容できる部屋がないので、百人づつ三組に分れ、二室で、先着の明石組から始めて九十度位相をずらせて開会、藤本支部長も三度挨拶、大谷先生にも三度お話をお願いした次第。

志筑からは、六台のバスが揃って出発、一部開通している淡路縦貫道を南下した。島中央の丘陵地帯を縫って走る縦貫道の両側に手入れの行届いた農山村風景が展開

する中、各バスには、関西電力勤務の会員が分乗して、大鳴門橋に今工事中の送電線淡路第二回線について、詳細な解説を行なった。バスは、千光寺の堂塔が山頂に影絵のごとくそびえる千山の麓の洲本ICで地道に下り、やがて福良から「うずしおライン」に入って、十四時二十五分大鳴門記念館に到着した。

大鳴門記念館は、淡路島西南端門崎に近い山頂にあり、会員は、この庭、二階および屋上から、大鳴門橋や四国の山海の景観を楽しんだ。風は強かったが空は晴れていた。記念館の中には、うずしお科学館や淡路人間浄瑠璃館もあり、いずれも魅力があったが、時間が許さず、観賞できなかったのは残念であった。

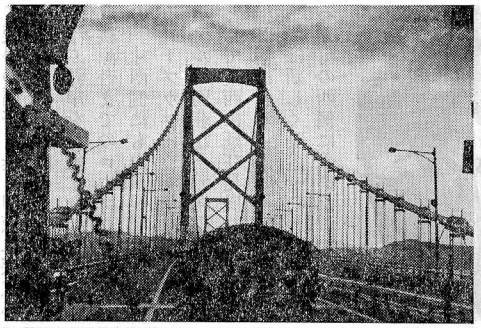
およそ三十分の後、バスに戻り、山を下りて高速道に入り、大橋を渡る。折しも海面には大小様々の渦が現れ、会員は車中で総立ちになって、車窓からこれを目に、またカメラに収めた。

バスは、一旦対岸の大毛島鳴門に渡ったのち、Uターンして、再び橋を渡り、十五時二十分頃橋をあとにした。

帰途は、うずしおラインの西北側の部分と縦貫道を乗継ぎ、十六時過ぎ志築に到着、しばらく待って、バス六台ともフェリーに乗せることができた。

フェリーは、十七時三十分出港、強い西風を受けながらも、平隠に走り、会員が夕食し甲板から淡路島、神戸、西宮の夜景を見ているうち、十八時二五分、甲子園港に着いた。

ここで、大阪京都に別れ、それぞれ二十時、二十時三十分、帰着し、関西支部の小冒険旅行は了った。



洛友会東京支部 旅行会に参加記

講大正一〇年卒　中村　秀治（84才）

東京支部の旅行会が十月十七日箱根芦の湖方面に挙行されるとのお知らせが来た。

昨年までは毎年十一月三日と決められていたが十一月三日は色々と行事が多いので重なるといけないからと御配慮で今年は十月二十七日に決められたとの御説明があり其のお陰で私も参加が出来た。

新宿駅東口はとバス乗場八時二十分集合とあり其の時刻まで殆んどの会員家族が集まられたが場所を間違えられて西口にお待ちの方を呼びに行くやら時間までに見えない一人にお電話なさるやら幹事の方の御心くばりも並大抵ではないなあと相済まぬ思いがした。其の為に出発が遅れ九時近くとなった。

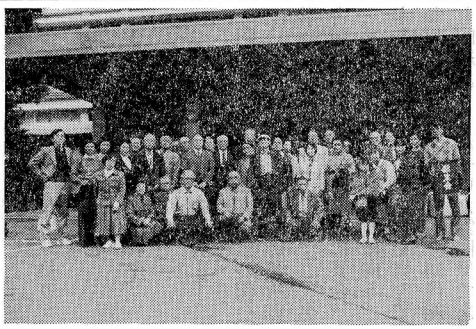
一番前の席に陣取り、頂いた参加者の名簿を見ると会員二十三名、家族十四名の計三十七名、電話の相手は直接昼食場所の小涌園ホテルに直行との事で欠員なし。

出発して副都心の都庁予定地の横を通り東名高速道路に入り老田支部長の御挨拶や幹事の御指示あり運転手ガイド山口女史の自己紹介あり、沿緑の説明を聞きながら、多摩川の鉄橋を渡る頃から前方の丹沢山並のはるか後方に富士山の山頂が見える。早や雪で真白だ。丹沢山並の最高峰大山（オオヤマ）は山の頂きがとんがっていて丁度ハワイホノルルのダイヤモンドヘッドによく似て居る。此の山に昭和四、五年頃登った時はケーブルカーが布設されて居たが戦時中取り外されたとか、今どうなっているかとガイドさんに聞いたが登った事がないので知らないと、隣の運転手さん今ありますよとの事、山は遠目にはとんがって見えるが登って見ると相当奥が広く神社（名称は失念）がお祭りしてあった。ガイドさんに同じ字の山が他県にあるがご存じかと聞いたら頭をかしげられたので鳥取県のホウキ大山（ダイセン）と云ふ此の大山より有名で同じ字で呼び名が違っていますねと物知り顔をして皆んなの苦笑を買った。

ガイドさんが遠望の富士山を見ながら三大仇討ちの曽我兄弟富士の仇討ち話しをして呉れたので三大仇討ちの外の二つはと問ふたら泉岳寺の四十七士の墓即ち忠臣蔵の仇討ちはすぐ答が出たが今一つが中々出て来ないので河合又五郎、荒木又右衛門に依る伊賀上野の仇討ちと亦々物知り顔。

東名を離れて小田原城見学にと向った。此の城は説明書きに依ると昭和三十五年に構築された新しい城で以前のお城は明治三年廃城令により取りこわされたものの再築との事。三層四階建ての立派なものでお城は外観が雄大で見上げる人の心を爽快にする。

ついでながら先年九州の島原城を見学した折り二階に全国の復旧したお城の写真が展示してあったが随分と復興したなあと思った。お堀端の城跡公園に『御感の藤』と云ふ藤棚があった。説明書きに依



ると、大正天皇が皇太子殿下時代に御遠出の乗馬が小田原町を御通過の折り馬が暴れ出して民家の藤棚に突込んだ殿下はお驚きになりお下馬されつくづくお覧になると奇麗な花が垂れ下っているので『立派な花だなあ』とおほめになったとの事。其の藤を城跡公園に移植したのが今の藤棚で『御感の藤』と云う名札が付いていた。実は此の藤の種子を小田原在住の知人から頂いて植え育て二十年前に川崎国際ゴルフ場に寄贈して六番テーグランド横に大きく繁茂して居ると云う思出の藤でもある。

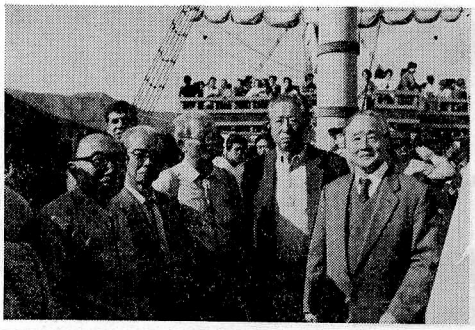
お城見学を終り愈々箱根路。湯本、宮の下を過ぎる頃ガイドさんが取出された絵による説明で箱根の古来から現在までの変遷を知った。即ち四十万年前から今日まで数回に亘る爆発により芦の湖や早川渓谷の出来たとの歴史を知る事を得た。

車窓から見る渓谷の樹々は紅葉には少々早くこれが紅葉した折りの風景を想像しながら昼食の目的地小涌園ホテルに着いた。既に食卓の用意が出来て居り新宿でお顔が見られなかった一人も既に着いて居られ全員深山料理と銘打ったホテル自慢の料理にビールが加わり楽しい食事が出来た。ホテルの玄関先で記念の写真を撮し湖尻へと向った。途中早雲山の東渓谷をへだてて向側の山に大文字の字が見えた。アーアこれが箱根大文字山かと点火時の眺めを想像した。

遊覧船の出港時刻に間に会はないかもと気をもんで居られる運転手さん、こちらもはらはらして居たが、丁度ぎりぎりで乗込む事が出来て、ほっとした。

腰掛の椅子も無く甲板に突立ち湖面を見ると沢山のボートや釣舟が浮ぶ湖岸を見廻すと強羅から湖尻桃源台までのロープウェイ、其の一寸西側にも山頂展望台に通ずるロープウェイ。湖岸に点在するホテル、別荘など元箱根町を中心として東西に延び発展して居る様相が伺はれる。

船は新しく築港せられたのであろう町の西側に着いた。



上陸して箱根関所を見学御番所の家の廻りを一巡して中をのぞき込み番所役人の模型人形で当時の仕事振りを知るを得た。

以前は（三十年も前）西側の船着場は無く関所が町の西端にあり昔をしのぶ事が出来たが今は町の真中になって居り関所と云ふ感じを無くしてしまった様で変んな気持ちになった。

旧跡を保存するなら其の周囲の環境にも留意しなくてはとつくづく思った。湖尻で別れたバスは既に着いている筈なのに仲々見付らない。ガイドさんがバスの停留場で漸く発見、一同乗込み帰路に付いた。

箱根新道を湯本まで一気に飛ばし小田原では海岸の波打ぎわに架設せられた藤沢方面行きの高速道路、今日は日曜日で車が多くノロノロ運転。何時に帰れるか？あきらめて居眠りで今までのつかれを医する方々等々。

藤沢駅で一家族とお別れし、横浜新道から東名に入り漸く順調に走り出し安心した。新宿の解散点までの間に老田支部長及幹事の御挨拶、並に運転手、ガイド女史に対し全員の心のこもった万雷の如き感謝の拍手を送り、心配して居た程の遅れもなく七時頃に出発点たる解散地に到着。

楽しい一日を過させて頂き御世話役の方々に厚く御礼申し上げます。

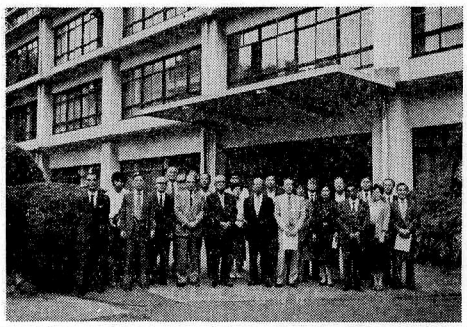
（終り）

プラズマ研究所をたずねて

――中部支部、秋の例会――

昭和六十年度中部支部秋の例会は、名古屋大学プラズマ研究所見学である。十月十二日（土）、名古屋大学にほど近い本山に集合。三々伍々プラズマ研究所に向う。本多支部長も早朝に東京を発って参加され、総勢二十一名。同伴組も四組あり、華やいだ雰囲気である。

プラ研到着後、さっそく会議室で寺嶋副所長および研究所スタッフの方より御説明をうかがう。核融合とは何か、プラズマとは何か、現在の世界におけるプラズマ研究の状況、将来計画、核融合実用化への見とおし等、親切にお話をいただき、人類の未来に向けて続けられている真摯な努力に、一同深く感銘を受けた。



その後見学に移り、まず研究所入口におかれた装置で、いろんな種類のプラズマを見せていただいた後、所内の各所におかれた設備を見学した。TPD－Ⅱでは、ガラスの真空容器の中であやしく輝くピンクのプラズマに接し、研究の現場にいる臨場感を覚えた。その他、名大プラ研の誇るプラズマ閉ぢ込め装置RFC－XX、トーラス型のJIPPT－ⅡUなど、時代の最先端をゆく数々の設備を目のあたりにして、科学の力をいまさらのように感じた。質問も多く出て、予定の時間をオーバーするほどであった。

見学を終え、一同プラ研のバスで東山ガーデンに向い、寺嶋副所長に、プラ研在籍の洛友会員富田氏も加わっていただいて昼食。午前中のムードそのままに、なごやかにかつ熱心に話がかわされ、昼食後解散した。

いつものことながら、前原幹事、石川幹事等関係のかたがたのお骨折りにより、楽しく有意義な集いでした。

（坂入記）

同窓会便り

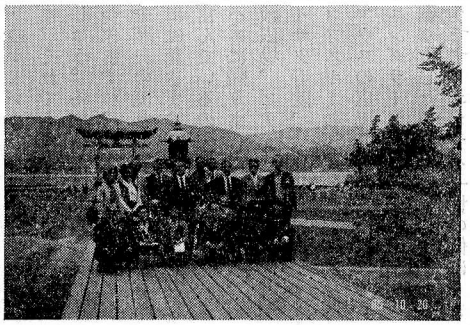
昭和20年卒 40周年クラス会

敗戦の年に卒業して今年で40年を迎えたので、盛大なクラス会を開きました。物故者5名も除く37名中14名が出席し、始めてご婦人も4名参加されました。直前になって6名の方が欠席され、残念でした。

10月19日（土）中国電力の宮島荘に集まり懇親会でスタートしましたが、洛友会中国支部長の松谷さん（中国電力社長）から多くのアルコール類が寄贈され、瀬戸うちの山海の珍味に舌鼓をうち、時間のたつのも忘れ、卒業以来初めて会うという方もいて話がはずみました。

2日目の20日（日）は宮島へ渡り厳島神社に参詣し、その他の名所も見学しました。幹事がガイドをつけたので、歴史の流れ、鳥居や建物の構造が詳しくわかり、ユーモラスな狛犬の雄雌の見分け方など、広島通産局に3年間勤務していた私にとっても認識も新たにいたしました。次いでロープウェイで弥山の頂上にのぼり、瀬戸内海の絶景を堪能しました。昼食は宮島一の豪華な新装の旅館でデラックスな気分に酔い、その席上、5年、10年刻みのクラス会でなくて毎年開きたいとの提案がなされ、来年は東北地方と内定しました。

次に豪華客船「銀河」にのって宮島から宇品港まで、瀬戸内海を湖風に頬を打たれながら、クルーズしました。船上、レストランを借り切っての結婚式が行なわれて、お色直しに新郎が船長服で現われたのには驚きました。宇品港からはタクシーに分乗して原爆記念館、広島城、比治山等の市内観光をして、その日の行楽は終りました。



21日（月）は有志5名（磯野、小林、清水、南野、老田）は広島中央G・Cでゴルフをエンジョイしました。私は地元の方3名に特別参加願って後発組となりました。すばらしいコースで気候も暑からず、寒からず、各人すばらしいスコアで磯野君85、小林君94、清水君91、南野君101、老田100でした。

この度のクラス会は地元の方々のご配慮とすばらしい天気に恵まれて無事終了し、再会を約して元気に九州、名古屋、京都、東京へ散って行きました。

（大月・川北・老田）

会員寄稿

ソ連、東欧旅行記 ①

昭20卒　老田他四郎

還暦を過ぎてから開始した四回目の外国旅行記です。一般的なおすすめとしてパック旅行は沢山のコース案内が出ていますが、シーズンを選びますと同じコースでも随分とお安く廻れます。また、北廻りにしますと、ロンドンへは半分の時間で到着いたします。十二日間位の行程が変化もあり最適でしょう。

この度のツアーで驚いたことには、ご年配の方が多く明治三十六年生れの八二才を筆頭に明治、大正生れの方が総勢一八名中一二名で昭和生れも大正に近い方々で老人部隊の感がしましたが、お元気そのものでした。三月にローマ、ナポリ、ベニス、ジュネーブ、パリ、ロンドンとルネッサンス街道を旅行した時は、小生が最年長でしたが、ソ連圏を若い人は敬遠しているのでしょうか。

航空機はすべてソ連国営アエロフロートを利用しましたが、運航技術はすばらしく一六八人のり（記号は85の頭文字）七六人のり（記号は65）しかないようでした。素人考えながら、航空機はジャンボになるほど事故に結びつくような気がいたします。（三五〇人のりもあるようです。）

九月二十日、成田を離陸してシベリヤ上空をひとっ飛び、九時間余でモスクワにつき、オリンピックのために建てた豪華なコスモスホテルに旅装をときました。テレビでよくパレードを見た赤の広場、レーニン廟、それに接して各国共産党指導者の墓、胸像（片山潜氏のもある由）など厳粛な雰囲気の秋雨のなか、参詣、見物の流れは後をたちません。丁度、衛兵の交替にぶつかりましたが、足をまっすぐ伸ばしての独特の行進でした。

隣接するクレムリンは共産党大会の行われる新ビル、ソ連最高会議幹部会やソ連閣僚会議の建物の近くにユーモラスな大砲の王様（重量四〇トン、弾丸も一トン）、鐘の王様（二〇〇トン）があり、二つとも一六世紀に造られたものとか。赤の広場には聖ワシリー寺院、クレムリン寺院には五つの寺院がカラフルに輝いています。説明のなかにイワン大帝やペトロ一世の名前が出てきました。バスでモスクワ市内をひと巡りしましたが、ゴーリキ通り、プーシキン通り、アルバート通りを廻り、マルクスの像、プーシキンの像、トルストイの像やプーシキン劇場、イズベスチャ、タス通信、モスクワ大学、ノボデビチ修道院を見ました。昔の貴族の館は現在、博物館になっています。地下鉄にのると料金は僅か五カペイク（一七円）、キエフスカヤ駅などと都市の名前がついていて、その都市の特色がプラットフォームに出ています。

猛スピードのエスカレータに八〇m位乗って四〇m地下のプラットフォームにつけば、彫刻やモザイク模様で飾られ、シャンデリアが輝いて美術館のようです。

モスクワから空路一時間余りでバルト海に面するレニングラードへ。一七〇三年ピータ大帝がつくり、ペテルスブルガと云ってロシヤの首都、ヨーロッパの窓口であった。第二次大戦の独ソ攻防戦は九〇〇日に及び、九万人の戦死者を出したので防衛祖国戦争記念碑が建てられているが、戦争の傷跡は殆んど見受けられない。夕食前にモスクワの広場、レーニン一〇〇年記念像、ほし草の広場、宮殿の広場、ワシリー島を見て、プリバルチスカヤホテルについた。このホテルもオリンピック用に五年前に建てられたすばらしいもので、一五階パノラマ食堂から見るバルト海の暮色は戦中派として平和の有難さを痛感した。

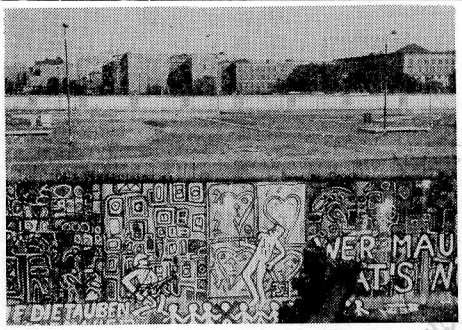
当地では何といってもエミルタージュ美術館!! 入場料は一ルーブル(三二〇円)、五つの美術館からなり、二七〇万点もある由でフランスの印象派を主にみました。モネ、ルノワール、シスレ、セザンヌ、ゴーギャン、ボナール、ピカソ、マチス、ブーランク、ダビンチ、ミケランジェロ、ラファエルやロダンの絵画や彫刻など東京上野の美術館の何年分だろう。パリのルーブルでも経験したように、それでも「群盲象を評す」でしょう。各都市では現地の案内がつきますが、絵の意味するところや歴史の流れ等々、その博識ぶりには驚きます。余りに広く変化に富んでいるので迷子になり、一人バスに帰りました。再びバスで宮殿広場、ピテト教会、十二月広場、イサク寺院、マイヨー宮殿、チャイコフスキーの家、レーニン博物館、マウスの広場(革命戦士の碑)、レニングラード大学、芸術の広場を廻りました。博物館も八つあるそうです。ニコライ一世の像はうまく写真に入りますが、イサク寺院などは大きくて、とりきれません。

レニングラードから東ベルリンまでは空路二時間、時差が二時間あり、観光の時間がそれだけ多くなるのは喜ぶべきか? 東ベルリンでは東海大学へ一〇ケ月留学した卒業ほやほやの美人ガイドがつき、買物でも大変お世話になりました。

東ベルリンではフリードリッヒ通りを経て、ファウストの翻訳をした森鷗外の住居(一八八七―一八八八)を見ました。ウンターデンリンデン通り、ブランデンブルク門、国立歌劇場、ライプチット通り(ショッピングセンター)、アレキサンダー広場(真中に三六五mのテレビ塔があります)。聖マリア教会、第二次大戦慰霊堂を経てペルガモン博物館につきました。

ビザンチン王朝の実物大のペルガモン大祭壇の模型、一九〇五年に発掘された市場の門(イオリヤ様式、コリント様式)、モザイクの床、ライオンや乳牛、龍の飾り、碑銘など数々の遺跡の全貌が日本語のカセットテープの説明でよくわかりました。一〇〇分の一の模型がありますがよく復元されています。

昼食後、国境を通過して西ベルリンに入り、幅一〇〇m、長さ一六〇kmに及ぶベルリンの壁(高さ三mの壁の上に直径三〇cmのパイプからできている)の一端を見晴台から見物しました。附近はポッダム広場と呼ばれ、一九二五年、一九三二年、一九四五年、一九五三年に撮影した大きな写真が飾られ時の流れを物語っているが、戦前は一分間に六〇台も自動車が行き交う繁華街であった。一〇〇mの幅の壁内に市電のレールが残っている。見物の旅人は多いが、ナチスの拷問の本部跡も草ぼうぼうで土産物店が賑わっている程度です。東から西へ一五〇万人も流れ込んだので、一九六一年に鉄条網から現在のコンクリートの壁になった。鉄条網を超えて脱出する写真もあり、一八七名が銃殺されている。壁に沿っての墓標がいたいたしい。左前方壁内の空地に小高い丘が望視され、その下の地下壕でヒットラーが愛人エバ・ブラウンと自殺したとのこと。西側の壁はニューヨークの地下鉄のように絵が一杯。



二〇〇年前にできたブランデンブルグ門は東西の国境に位置している。その近くにタンク二台、大砲がアクセサリーの戦争記念碑があり、二名のソ連兵が二時間交替で立っている。西ベルリンは四カ国で管理されているが、ここはイギリス管理下にあるので、東ドイツの西ベルリンのイギリス地区のソ連兵とややこしいです。

帝国議会、国際会議場、ベルビュー宮殿、勝利の塔、ビスマルクの像を窓から見ながらウィルヘルム一世記念教会(二世が建立)でバスを下りる。同教会は第二次大戦による破壊のまま残されていて、広島の原爆ドームと同じである。附近はドイツ第一のクーダム通り(ブランデンブルグ公通り)でヨーロッパデパートで買物をしたが、品数の多いこと、高級品にあふれ、チーズだけでも三〇〇〇種類あるそうです。

東ベルリンのメトロポールホテルもすばらしいの一語につきる。レストランの壁には歴史的な農民戦争の絵が三〇m余にわたって描かれ、ピアニストがリクエストに応えて日本の曲なども沢山弾いてくれました。

東ベルリンからライプチッヒまでバスで三時間、途中エルベ川を渡りましたが、テレビのコンバットに出てくる風景が多い。ライプチッヒは商業の町、スポーツの町(最大のスポーツ大学)、印刷の町、見本市やバッハの音楽祭でも有名。一二世紀にできた聖トーマス教会にはバッハの三番目の墓がありました。

ナポレオンは七年間、ヨーロッパの王となったが、ナポレオン戦勝記念碑(一九一三年)はピラミッドを模して建てられ、五〇〇の階段があり中のホールは反響がいいのでコンサートが開かれる由、堂々とそびえていました。

バス二時間でドレスデンへ。ゼンパー美術館(ドレスデン絵画館)で代表的な二八点の絵を中心にドイツ美術の粋を見学しました。ラ

ファエロ、フランチェスコ、コッサ、メッシーナ、コレッヂオ、ティティアン、ベロネーズ、ヴァンダイク、ルーベンス、レンブラント等の画家のビーナス、キリスト、受胎告知、聖セバスチァンの受難、聖母マリアなど宗教画が中心です。№23の鷲にさらわれた少年が恐怖でオシッコをたれている絵もあった。

エルベ川に沿って丘の上に古城が三つ望見され、ツビンガー宮殿（王冠の門）、オペラハウス、アウグスト一世の像を通りすぎた。ここはドイツ三番目の町で緑の町と云われ、ザクセンの首都であった。

翌日は白磁系のマイセン陶磁器博物館（工場）と一五〇年間も陶磁器の工場であったアルブレヒトブルグ城を見学した。どちらも撮影権と云って一マルクと半マルク支払った。製造工程を詳しく聞いたが、玉ねぎ模様と交叉する剣がトレードマークで記念に数点購入した。

ドレスデンから五〇km走ると標高九〇〇mの国境の町チンバルトに午後四時到着した。六時にパスポートを回収にきて七時にチェコスロバキアに入国オーケーとなった。三時間もバスに缶づめとは、セッカチな日本人にはどうしても分らないことであった。

しかし、ホテルの両替は三六%のボーナス付きであった。チェコの父と云われたカレル四世（一四世紀）はプラハ城、聖ビート教会、カレル大学、カレル橋をつくりました。聖ビート教会はフランス人、ドイツ人が建築にあたったが、一五世紀の宗教改革戦争で一時中断しました。ミサの他コンサートも開かれる由ですが、バスラス礼拝堂にはフェルヂナンド一世の墓がありました。プラハ城にはグスターフウサーク大統領官邸が隣接し、執務中は国旗がひるがえっています。（以下次号）

ヒマラヤ杉のつぶやき ③

講昭和13年卒　竹村　清

話が途中で途切れたので、もう一度A杉とB杉の名前の付け方を説明しておこう。校舎に向って右（西寄）をA杉、左（東寄）をB杉とした。前出の旧電気工学講習所を背景にした写真でも、B杉（左）の方がA杉（右）より大きくたくましくなっているので、A杉はどこか体の具合でも悪いのかと気になっていた。

A杉も昭和四十七年頃までは、体の調子が左程悪いとは自覚していなかった。しかし、これから四、五年経った昭和五十一、二年頃には、A杉はB杉にくらべてぐっと成長も遅く、身体全体の色艶も失せて常緑樹でありながら落葉も目立って多くなって来た。B杉の方も早くA杉を何とかしなくてはと気が気でない。我々同士の言葉は通じても人間様には通じない。

五十二年のいつの頃だったか、教室関係の人であろうか、我々の傍で自分たちの幹に触りながらヒソヒソと話をしている。

〃どうも西寄（右）のヒマラヤ杉の様子がおかしいね〃、〃この間の共同側溝の工事をした時に根を切らないよう充分に注意をしておいたのに……根がやられたのかな〃、〃一度農学部の専門の先生に相談してみてはどうだろう……〃などなどの会話が聞えてくる。

ご承知の方もおありかと思うが、情報工学教室と我々ヒマラヤ杉との間には、大学全体の電気、ガス、水道の幹線を通す共同溝が埋設されている。

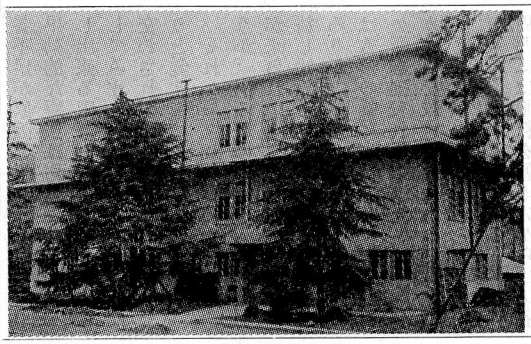
こんな会話が交わされてから数日経ったある日、見覚えのある教室の先生と白衣を着た農学部の先生らしい数人の方が我々の診察？来られた。別にお医者さんのように聴診器をあてるでもなし、A杉の幹に触ったり、皮を少しはいだり、根の張り具合や、葉の茂り程度などを丹念に調べられ、まるで病院で裸にされて診察されているかのように、A杉もすっかり恐縮してしまった様子である。

〃外観から見たところ、少し弱っているように見えるが、しかし同じ時に植えられてこれだけ成長の度合が違うとすれば、何か原因があるのでしょう。一度研究室に採取した試料を持って帰って良く調べて見てから対策を樹てましょう〃。〃どうもやっかいなことをお願いしまして恐縮です。何しろこのヒマラヤ杉は、戦前の旧講習所時代からのものですからどうぞ、よろしくお願いします〃。

こんな会話が教室の先生と農学部の先生との間で交わされていたのを、はっきりと覚えている。

〃オイ!!A杉よ、よかったなあ、お前も京大農学部の名医の先生に見てもらえて……。戦争中は疎開もできず、爆撃にあった時は死なばもろ共と誓った仲ではないか。キット起死回生の手当をしてもらえるよ。安心して待っていようではないか〃と同僚を励ましては見たものの、果して直してもらえるのかと一抹の不安はぬぐいされなかった。

それから一ケ月も経ったであろうか、我々を診察してくださった見覚えのある農学部の先生の一人が、情報工学教室の扉をくぐられた。



この一瞬を我々は千秋一日の思いで待ちこがれていたのだ。結果は凶と出るか、吉と出るか。

あの先生の教室のどこへ行かれたのだろうかと、四階建の教室の窓を見渡すと三階のY教授室に先の先生とY教授とが向い合って座っていられるではないか。

お二人は、机の上におかれた紙を前にして何か熱心に話をしておられる。

風よ!!　吹くな！　枝ずれの音でひそやかな対話が聞えなくなるではないか。

〃先生色々厄介な調査をお願いして恐縮です。早速とご連絡をいただきお礼の申し上げようもございません。

ところで検査の結果は、如何でしたでしょうか？〃

以下これらの対話の内容の結論を紹介しよう。

〃Y先生、あれは共同溝の工事の時に少しは根を切られたので、それも原因の一つかもしれませんが、試料を分析したり、顕微鏡で色々と観察した結果、多分永年の栄養不良が原因と推定されます。〃

〃そうでしたか。今まで何の肥料もやらず自然のまま大きくなって行くものとばかり思っていました。今から思うと少しかわいそうな気もしますが……。それで対症療法として何かよい案があるのでしょうか？〃

〃ソウデスネ。何しろ永年の栄

居所不明者年次別 一覧表

昭和60年11月30日現在
表中敬称略

第2版電算化名簿発行に際し，名簿には住所が記載されているが洛友会会報が3回以上連続して返送されて来ている会員を調査しましたところ，下記のとおり居所不明に該当する会員名が判明致しました。従ってこれらの各位は第2版名簿第5頁に記載の居所不明者117名中には含まれていないことは勿論であります。今回これらの会員各位は，一応居所不明者として登録致します。当該会員の大多数は，幸いなことに勤務先が判明しておりますので，同一勤務先の方，同期の方，若しくは，該当会員のご消息をご存知の方は，お手数ですが事務局までご連絡を賜りますようご協力の程お願い致します。なお卒業年次の次の数字は，1：電気，2：電子，3：電二を示します。（本表中には，海外駐在者で居所不明者及び電気工学講習所卒業生の分は除外してありますのでご了承ください。

卒業年	氏名	勤務先	卒業年	氏名	勤務先
昭28	塩崎　晟	新日鉄，八幡製鉄所	昭47.3	西本　章	三菱電機
31.1	川崎　洋	旭化成，出向サン電子工業	48.1	市村博幸	東芝
〃	長町恒資	三菱電機	48.2	市江孝道	古河電工
38.2	片桐悠史		49.2	細野文雄	国鉄
39.1	柏村卓男	NTT	50.1	尾上一彦	川崎重工
〃	三木将男	古河電工	〃	黒江　茂	沖電気
41.1	大橋　旦	NTT	50.2	熊谷義三	シャープ
42.2	杉本　健	国鉄	〃	小森光修	NTT
42.3	片山修二	NTT	50.3修	松浦道明	〃
43.3	的場　徹	日本原子力研究所	51.1修	西島由人	富士通
44.2	堀　忠布	国鉄門司電気工事局	52.1	稲津雅弘	トヨタ自工
44.3	松本俊郎	富士電機	〃	古川清二	郵政省
45.2	北河潤	動力炉，核燃料開発事業団	52.2	田中正人	ソニー
45.3	中島俊雄	日本電気	53.1	奥　一郎	富士電機
〃	新田隆司	関西電力	56.2	大津山公平	富士通
46.1	大野政和	新日鉄	57.2	岩田敏裕	中京テレビ
46.3	中嶋邦典	NHK	57.3	平田栄志	マツダ

以上34名

事務局だより

おわび

洛友会会報十月号（一三三号）〝総会、支部だより〟の内、三ページに掲載しました〝中部支部碁会だより〟の見出しを編集子の不注意により誤って〝中国支部〟と記載致しました。ご寄稿を賜りました石川氏並びに中部支部会員各位にお掛け致しましたご迷惑に対し、深くおわび致します。

養不足が原因と思われますので、早効的な療法はありません。しかし出来る限り回生のための努力はしてみましょう〟とこんな会話が交わされていたのを今でもはっきりと覚えている。

それからどれ位い経ったであろうか。ある日のこと数人の作業員が来られてA杉の根の周囲を浅く耕し始められた。何をされるのだろうかといぶかっていると、今度はA杉の幹に太いドリルで穴が何ケ所も掘られるではないか。マサカA杉を殺す気ではあるまいと不安げに見守っていた。

後で判ったことであるが、根の周囲には肥料を幹の穴からは栄養剤を点滴？されたのである。その栄養剤や肥料の名前は知るよすがもない。

（以下次号）

訃報

講大5　立石亨三　60・12・3
大12　品川秀雄　60・11・12
講大12　八木徳三　60・11・8
講大13　柴田美繁　59・6・
昭3　白井好巳　60・10・20
講昭5　遊津眞吾　60・9・22
講昭10　飯沼正春　60・8・24
昭18　高島克己　59・2・26
昭22　山本重俊　57・11・5
昭46　河野誠　60・11・21

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

明けましておめでとうございます。会員各位におかれましてもますますご健勝でご活躍のこととお喜び申し上げます。

洛友会としましては二年目に一度の最大の行事であります名簿の発行・発送を終りましてひといきついでおります。ここでお詫しなければならないのは、会報の予告では十一月末発送となっていましたのに、これが数日遅れましたご迷惑をお掛け致しましたことを深くおわび申し上げます。

名簿発送後、早速と多数の会員各位のご連絡や、ご忠告を賜り厚くお礼申し上げます。今後共よろしくご指導、ご支援の程を。

（竹村記）